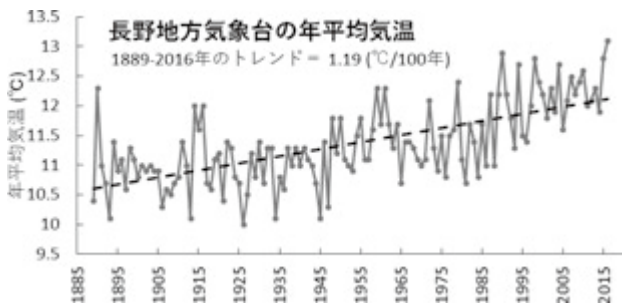
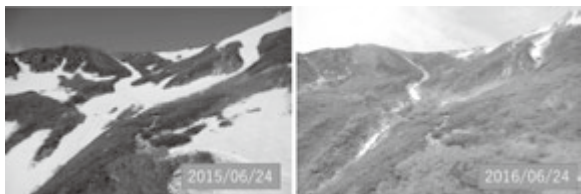


Overview 2016年の自然環境を振り返る

温暖化すすむ 産業革命以降の気候変動により、長野県でも2016年の年平均気温は多くの地点で観測史上最高を記録した。今後もより急速な温暖化が予測されており、社会・産業や生態系への影響が懸念される。(栗林)



雪融け早い 6月 2015年～2016年の冬は県内各地で雪が少なく、春の気温は記録的に高かった。この影響によりアルプスの雪融けは例年に比べて約1ヶ月も早まった。木曾駒ヶ岳千畳敷に設置しているインターバルカメラで同じ6月24日に撮影された2015年と2016年の雪融けの様子を比べると、その違いは歴然。(浜田)



鹿島槍ヶ岳カクネ里雪渓(氷河) 学術調査団も記録的な少雪の影響を受けた。雪渓をたどって調査地であるカクネ里にまで到達することができず、予定された調査の一部を断念。(富樫)

イノシシ、北アルプスに進出 2016年秋の北アルプス北部・爺ヶ岳の調査で、お花畑をイノシシが掘り返した痕跡を確認。同様の被害は、これまで南アルプスや乗鞍岳で報告されているが北アルプス北部では初の事例(その後、頸城山塊の火打山でもイノシシ初確認という報道あり)。(尾関)

諏訪湖でワカサギ大量死 2016年7月26～27日、諏訪湖でワカサギなどが大量に死んでいるのが見つかった。少雨・高温下で発達した貧酸素水塊による酸欠が原因という見方があるものの、検証で



きる観測データが整っておらず真相は不明のまま。(北野)

諏訪湖岸に打ち上げられたワカサギ(写真提供:水産試験場諏訪支場)

ミョウガの実がなる 11月上旬 ミョウガに赤い「花」が咲いたという情報が北信などから数件寄せられた。写真を見るとそれらはすべてミョウガの「実」だった。ミョウガ(ショウガ科)の花になる部分は食用とされ馴染み深いのが、実をつけることは珍しいようだ(気象条件との関係は不明)。(石田)

～私の研究フィールドでの出来事～

開田草地に関する論文の出版つづく 火入れや草刈りで保たれてきた木曾町開田高原の草地について、伝統的な管理が生物多様性を維持していることを示す国際的な研究論文の発表がつづいた。伝統的手法が再び見直されている。(須賀)

鹿の野外調査をスタート 信州大・森総研との共同で、北アルプスで夏を過ごすシカの越冬生態を調べはじめた。場所は小川村と大町市八坂、多



くのセンサーカメラを使って森の中を移動するシカや他の動物を撮影。これらのデータを鳥獣管理につなげたい。(黒江)

ライチョウ論文改訂 森林総研との共同研究でライチョウの温暖化予測に取り組んでいる。2015年夏にその成果を海外誌に投稿したもののアクセプト(受理)はもらえず。その後、長野-札幌と離れた著者同士が

